審査の結果の要旨

氏名　フランソワ・ブランシャック

論文題目　The Role of Figuration in the Theory and Design of Robert Venturi
(ロバート・ヴェンチューリの理論とデザインにおける具象形態の役割)

この論文は、ロバート・ヴェンチューリ（以下 RV）の理論とデザインにおいて、フィギュレーション（以下 Fig)、すなわち具象形態が果たした役割を明らかにし、一般化している抽象的形態の建築と比較し、具象形態に基づく建築の理論とデザインがもちうる可能性について基本的な知見を得ることを目的としている。

本論文は、五つの章で構成される。
第 1 章では、研究の目的と背景、研究方法と資料、論文の構成、既往研究について説明している。建築のデザインでは普遍化した近代建築の抽象的表現が大勢となってきたが、現実の建築が多様な具象的形態に支えられているように、Fig に基づくデザイン理論は建築のデザイン方法を拡張しうるものであり、その研究の進展が待たれていること、RV は一貫して建築のコミュニケーション機能に着目、Fig が表象のプロセスであるとの理解にたって言説と作品を展開してきたこと等を示した上で、研究目的として、１）RV の Fig に基づくデザインの理論と方法を解明すること、２）建築デザイン一般において Fig そのものがもちうる可能性を示すこと、３）RV の理論が日本の建築文化にも影響を受け展開したことを示すこと、４）RV が受けた影響関係を探ることの四点が説明される。論文は大きくは、RV の言説分析と作品分析の二つからなるとされる。はじめに芸術と建築における Fig の理論を概観し、ついで RV の著作と作品における Fig の様態を分析、理論的背景の中で RV の位置づけを行い、最期に結論として全体を総括する。RV の言説分析は、主要著作および RV とデニス・スコット・ブラウンへのインタビューに基づくこと、また、作品分析は、一定の規模をもち Fig の使用が明確で年代が偏らない作品を選択するとともに、全作品についても Fig の適用を概観するとされる。章末で関連研究の内容が確認される。

第 2 章では、シンボリズム、サインと比較しながら Fig の定義を確認した上で、ウィトルウィウスからコルビジェまで続くアントロポメトリ的伝統の他、フランス革命建築、ロシア構成主義などの芸術と建築の言説に見られる Fig の多様な様態が検討される。最期に建築における Fig を整理し、アナロジカル（類比的)、レシプロカル（相互的)、オキュペーショナル（身体的）の三つの型が存在することが説明される。

第 3 章では、RV の略歴を確認、T.S.エリオット、W.エンプソンらの影響が説明され、ついで RV の四主要著作と二論文、インタビュー結果に基づき RV の言説における Fig の用法を分析、１）ダックとデコレーテッド・シェッド、２）ウィトルウィウス的人間像とその変形、３）グローブとミトン、４）傘と着物という四つの特徴的な用法があること、Fig が近代建築の抽象的デザインに対する批判の道具であったこと、日本建築を Fig によって理解したこと等が示される。最後に、前章の検討も踏まえ、RV の理論が 18 世紀の＜語る建築＞と＜ロココ＞、アメリカの＜ヴァナキュラー建築＞に影響されたこと、他にゲシュタルト理論、連想理論との関係が検証される。

第 4 章では、RV の 17 の建築作品・案をとりあげ、Fig の用法を分析している。分析は記号の二面性と建築形態に着目し行い、それぞれの作品が＜具象的イメージ＞、＜正投影像＞、＜建築の構造体＞などの要素からなる一体的な記号を形成していること、Fig の用法としては、１）デコレーテッド・シェッド、２）建築的相関性、３）都市的同型性、４）都市的メタファーという四つの型が存在することが示される。最後に RV の全作品について Fig の有無が検討され、RV の活動の全期を通し、多くの作品において Fig の使用が認められることが指摘される。

第 5 章では、結論として、1）RV の Fig の起源がネオクラシシズムの＜語る建築＞にあること、２）Fig は抽象的でシンボリックな近代建築を批判し、機能的な性格を伝えるコミュニケーションの建築を説くための道具であったこと、３）三次元イメージを表象する Fig には平面性を強調する＜平面の美学＞が生まれていること、４）作品に見る Fig の四型はデコレーテッド・シェッドの展開型であり、前二型が垂直的なファサードに、後二型が平面に関係し、各々異なるイメージに対応していること等が指摘される。最期に RV の Fig を建築論・デザイン論の中で位置づけ、その核心をなすデコレーテッド・シェッドが、1）近代建築批判と自説擁護のため組み立てられた戦略的な記号システムであったこと、2）機能性において機能主義を越えようとした新たな機能主義であったこと、3）近代建築の抽象的、還元的なドグマに対抗した初期の建築論から、建築を記号に還元する新たなドグマへと変質したものであったこと、4）装飾をコミュニケーションの装置として機能的に捉え直すものであったことの四点が総括として示される。

以上のように、本論文は、ロバート・ヴェンチューリの理論とデザインを具象形態とその表象機能から捉え直し、これまで明確でなかった建築における具象形態の役割を実証的に解明、建築の理論とデザインの両面において新しい展開をもたらしうる基本的な知見を示し、建築意匠分野の研究において大きな寄与をなしたものと判断できる。

よって本論文は博士（工学）の学位請求論文として合格と認められる。